

Title	ペスト対話に見える近世ヨーロッパ(一)(史料翻訳)
Author(s)	佐々木, 博光
Editor(s)	
Citation	人間科学. 2009, 5, p.123-135
Issue Date	2010-02
URL	http://hdl.handle.net/10466/10686
Rights	

【史料翻訳】

ペスト対話に見える近世ヨーロッパ（一）

佐々木 博光*

以下は、Dialogvs medico-chymicus. Ein Gespräch/ Vber den Artzten/ so von der jetzo regierenden Seuche der Pestilentz geschrieben haben/ vnd vber jhren Artzneyen/ Gehalten zwischen einem vornemen/ gelehrten Bürger/ vnd einem Handwercksmanne/ in einer berumbten Stadt Sachsenlandes. Anno: 1607. (作者不詳『医薬に関する対話。いま猛威を振るっているペストについて書く医師、彼らの薬について、身分の高い学のある市民と一介の手工業者の間で交わされた会話、ザクセンの名の知られた都市にて(一六〇七年)』)の全文和訳の前編である。訳者はドイツ連邦共和国ヴォルフエンビュッテル市にあるヘルツォーク・アウグスト・ビブリオテークで、ペスト文書と総称される史料群と取り組んださい、このペストに関する対話に出くわした。

ペストは一四世紀中葉のいわゆる黒死病以降もヨーロッパの各地を襲い、一六世紀以降も一六八〇年代に大陸における最後のペスト波がおさまるまで、ほぼ一〇～二〇年の周期でヨーロッパを襲った。その後も一七二〇年のマルセイユのペストにいたるまで局地的な被害はのこり続けた。ペストの爪痕とそれに対する対策が、近世ヨーロッパ社会のひとつの横顔をなしたといっても過言ではない。神学者や教会関係者、さまざまなレヴェルの医療従事者による、ペストに関するおびただしい数の文書も残っている。しかし対話という手法を使ったペスト文書は、管見の限りではこれ一篇だけである。

対話は手工業者と学のある市民をパートナーに設定し、手工業者がペストを扱う医学書の使い勝手の悪さ、難点を嘆き、市民がそれに応答して、その上手な使い方を指南するという形で展開する。訳者がこのペスト対話に注目するのは、それがとくに、ルター派医師のペスト文書やルター派地域から出たペスト医学書の特徴をよくつかんでいるからである。以下では史料の前半部を訳出する。後半部は次号以下に掲載されるだろう。史料の解説および訳注は後半部の公刊時に譲りたい。

* 大阪府立大学人間社会学部人間科学科

貴い方々、偉い方々、尊敬すべき方々へ。シュメアミッケ、ヒンデンブルク、ヴァッルハウゼンのルートヴィヒ・フォン・デア・アッセンブルク、カルベヤツィヒタウのヨアヒムの浄福の息子ルードルフ・フォン・アルヴェンスレーベン、ウツメンドルフのゲプハルト・フォン・マイエンドルフ、アイヒェ・パール・ウント・エアレーベン、エルプゼッセンのゲプハルト・ヨーハン・フォン・アルヴェルンスレーベン、わたしの前途有望な貴公子諸君、そして後援者の方々へ

貴い方々、偉い方々、尊敬すべき方々、貴公子諸君、そして後援者の方々へ。わたしは目下の小冊子を公刊すべきかどうか、ずっと悩んできました。むかしからある真実の格言、「誠実は憎悪を生じる」をわたしはよく知っています。それなのに本書には真理がいっぱい詰まっています、それが提供されると無知から解かれる人が増えるからです。でも結局わたしはいろいろな理由を考慮し、公刊に踏み切りました。先人が「他人の誤りが正される」と自分を慰めたように、わたしも同じように自分を慰めました。だからわたしは語りあいます、同志プラトン、同志アリストテレス、しかしそれ以上に同志真理と。わたしは普段どおりに通り過ぎました。ただ物自体にかかわったに過ぎません。ですからこの書物は誰からもわたしがその人に異議を述べる場合にも悪くは取られますまい。わたしはむしろ、他の人たちに事態をよりよく、より深く考えてもらうために、手引きを与えたかったのです。それに関する権威を矮小化しようなどという気持ちは毛頭ありません。誰にでも、どんな題材についても、忌憚なく自分の意見を開陳する自由があります。なぜわたしはこの件でそれほど恨みを買わなければならないのでしょうか。名前を公表するのをいまのところまだためらっています。しかしわたしはみなさんの偉い方々、尊敬すべき方々に、この小冊子を献呈することにしました。彼らは立派で、(真理に耳を傾けようとせず、わたしと真理を愚弄するような人がいても)この本を弁護し、わたしを引き立ててくれるような気がしたからです。熱心にまめまめしく願いする人たちがそのことを気にかけてくださり、偉い方々、尊敬すべき方々がわたしに指示を出すように仕向けてくださったのです。わたしの図書館の日付では、一六〇七年一月二日。

貴い方々、偉い方々、尊敬すべき方々、世話好きな方々へ
作者 D.

ペスト医師と彼らの薬について、ザクセンの名の知られた都市で、学のある市民と一介の手工業者の間で交わされた会話。

市 民：こんにちは。どこに行くのかね。

手工業者：ありがとう。本屋に行くところさ。

市 民：本屋だって。仕事で手一杯だろうと思っていたのに。さてはまだ市参事会員になる夢を捨ててないな。

手工業者：あらまあ、ぼくがこんなに沈んでいるのに、そのぼくをからかうとは。神様、この方をお許してください。

市 民：何で君は沈んでいるの。

手工業者：本当に知りたい。知りたいのなら、教えてもいいよ。

市 民：もちろんさ。ぼくが助言できることなら、何でもするよ。

手工業者：君もよく知っているぼくの妻、あいつがぼくのところにいつまでも居座っていることにとやかく言うつもりはないさ。ただ流行の恐ろしいペストに気をつけたいだけだ。危険を避けるために、わが家にペストに対する良薬を備えておきたいだけだ。ぼくは栄養もよくないし、財産もないから、それを避けるのは難しい。だからおととい本屋に走り、名医が勧めることを尋ねたさ。本屋の親父はぼくの前に冊子を積み上げた。ぼくはどれを買えばよいのかわからない。

市 民：一番よいと思うものを選べばいいじゃないか。

手工業者：ああ神様、ぼくはどれを選んだらよいのでしょうか。そこで本屋の親父に頼みました。ぼくのために選んでほしい、彼が選んでくれるものを選びますと。ぼくはそれが一番気に入るはずだと。それから彼がぼくの立場ならきっとそうしたように、感謝してお金を払いましょうとも。

市 民：それで君は何を選んだの。

手工業者：ぼくは仕事になかなか戻らず、そこにある本すべてを見渡したけれど、どれを手に入ればよいのか皆目見当がつかない。ですからもう一度本屋の親父に水を向けてみるつもりです。

市 民：君が何も買わず、三日も通って、いろんなコツを盗むようでは、彼も満足すまい。

手工業者：ぼくは何を学ばよかったですでしょう。ぼくは迷い、度を失っただけのこと。たしかにそれは名医によって十分考え抜かれたものかもしれませんが、でもぼくには何も得るものがありません。

市 民：いったいどうして。君は話題になっているそれをちゃんと読んだのではないの。君がそれをどんな風に理解したのか聞かせてもらいたいな。

手工業者：どれもが主としてふたつの点を扱っています。ひとつはどのようにペストを防ぐべきか。いまひとつはペストに襲われたら、神のご加護のほかに、どうやってそれに対処すべきか。

市 民：どの冊子もこのふたつを取り上げるのが気に入らないの。

手工業者：全部というわけじゃないけど。

市 民：何がそんなに気に食わないのか、教えておくれよ。

手工業者：これらの報告がどんなにぼくの気を重くしていることか。君はそれがぼくのためになると思っているみたいだけど。

市 民：まったくそのとおり。

手工業者：賢い人たちのためだけでなく、ぼくやぼくとちょぼちょぼの人たちよりも劣る大勢の人たちのためにそれが書かれるのだとすれば、だれにでもわかるような言葉で書くべきです。賢い人たちはとくにラテン語の本を十分揃えています。そこから学べばいいのです。そんな人たちのためにドイツ語で書く必要なんてありません。

市 民：だけどそれはドイツ語で書かれているよ。タイトルだけを見るならば、そうだ。

手工業者：タイトルはたしかにドイツ語だけど、本文にはラテン語やギリシア語が出てきます。苦もなく読めるドイツ人もいるかもしれないけど、それがわからない人もいます。

市 民：他に何かある。

手工業者：あんまり長いようだと、正しく読み、それを理解し、記憶するために、手工業者は相当な努力を積まなければなりません。

市 民：そんなことに煩わされなさるな。全部読めなくたって構わない。全部覚えようなんて、土台無理な話さ。指示される薬の使い方さえわかれば大丈夫。そこだけならそんなに長くはないはずだ。ぼくもひとつもそれを買って読んだわけじゃないけど。

手工業者：それが違うのです、分量も多いし、長いのです。薬をアルファベットで表し、数えてごらんよ。お願いだ、そのうちのいくつぐらいが必要なのか、教えてください。

市民：五つ、いや七つぐらいかな。

手工業者：ああ神様、五つや七つも。アルファベットを全部使っても足りやしない。一まわりじゃ済まず、二まわり目に入る。そんなに多いのでは、何を選んでよいのかわかりません。それじゃあ全部試してみなけりゃ。でもその多くを買わなきゃならないなら、ぼくの財布は空っぽさ。

市民：全部買うには及ばない。一つかふたつ買えばよい。他は放っておきなさい。

手工業者：でもそれでは十分じゃない。そう書いてあります、一つじゃなくて複数の薬を使いなさいと。女の使う薬は別、こどもの使う薬も別、紳士淑女の使う薬も別、使用人の使う薬も別とくる。鼻、耳、心臓、動脈に特別な薬を塗るよう処方するし、中だけでなく表面にも使うよう指示がある。ぼくは惨めな男、妻子に使用人がある。お金はほとんどない。どうやってこんなにたくさんの薬が買えるというのか。たとえ買えたとしても、ぼくやぼくの身内が、今日はどれ、明日はどれを使えばよいか、それを指示してくれる侍医が必要です。自分の生業や家計を顧みなくてよいのなら、是が非でもそうしたいのだけど。

市民：本当のことを言うと、私はこの疫病のさなか、薬を換えるのが本当に必要なのか疑問です。病毒に対して、良質で、すでに試したことのある薬を少々、一人が一種類持っていれば十分だというのがわたしの意見です。この一つを中にも外にも使う。予防のために、万一神の御意志によって感染した場合には、治療のために、大きな御利益とともに摂取できるように。

手工業者：どうもありがとう。薬に関する不毛な議論を終えるにあたって、ぼくは自分の意見を変える気はありません。むしろ自分の特上の上着を質入するのは、お金が払えるようにするためです。

市民：君はたかが薬にそんな投資できやしないと、さっきは嘆いていたぞ。

手工業者：大枚をはたく気はありません。でも何種類もの薬を大量に揃えるほうがぼくには厄介です。たった一種の薬で自分と身内が助かるのなら、それにお金を使わない手はありません。感謝して払うつもりです。それは簡単に

使え、使い方も覚えやすいのだから。本を走り読みして、あれやこれやの薬をどうやって服用したらよいか見ているようじゃだめ。ぼくは一種類の薬で十分だと思う。一種類でペストの時期を乗り切った人の話を聞くもの。もちろんペスト本の作者だって自分のことならそんなことはよくわかるのに、書いているうちにだんだんわれを忘れるのかなあ。馬鹿にしているように聞こえるかもしれないけど、むかし聞いたことを言わなければなりません。粉薬を用意して、一回だけそれを飲めばよいそうだ。どんな病毒からも一二年間守られるそうだ。もっとよい方法を準備せにゃならん人もある。一回の服用で三〇年もつような薬を。生命の危険さえなければ、ラテン語で砒素と呼ばれる砒煙、水銀、クモ、その他の危険な毒物でも食べる人がいるかもしれません。でもそんなこと誰が信じるものか。ぼくはそれを信じようとは思わないし、そんな粉薬を服用しようとも思いません。聞くところによると、それは有毒物質から作られているからです。毒は毒で一掃される。ぼくはそれが理解できないし、ぼくの頭にそれはなじまない。一人の人間が一度だけ摂取した一つの薬で、丸三〇年病毒から守られたのかどうかを判断するには、時間があまりにも長すぎます。君がよかれと思うことが、ぼくにはおろかな判断としか映らないのです。

市 民：ぼくも最初は作り話かと思いました。けどぼくは事態を深く考え、名の通った、秘薬によく通じた医師の書くものを熱心に読んでみて、考えを改めました。ぼくは有毒物質からその粉薬を人工的に製造することができると思っています。効き目を測るには時間がかかりすぎるとい意見にぼくも異存はないよ。本当は三〇ヶ月、あるいは三〇週、いや三〇日、三〇時間防げれば、それで十分なのに。

手工業者：でもそれが有毒物質から調合されるというのは、やはり合点が行きません。

市 民：それができるのさ。

手工業者：でもどうやって。少しヒントをください。

市 民：ああそうしよう。君も絶対に最後はぼくに同意することになるから。テリアクについて聞いたことはないかね、それはくさり蛇という猛毒の蛇の毒にも効くのだ。それはこんな場合に服用するあらゆる薬の中で一番の妙薬です。この蛇でなければ、テリアクでなくてもいけます。蛇の毒が強く、

有害であればあるほど、テリアクもよく効きます。君はそれをどう思うかね。

手工業者：それなら聞いたことがあります。フランスに長くいたことのあるところが、どんな風にこの蛇に対処したのか、よく話してくれました。でもぼくはとっくのむかしにそれを忘れてしまい、それについてその後は考えてもみませんでした。

市民：有毒物質から毒に効く薬ができるということを、いまなら信じられますか。

手工業者：いまとなっては信じるしかありません。しかしどうしてそうなるのか、ぼくにはわかりません。

市民：君にラテン語ができれば、説明できるのだけど。

手工業者：ラパテン語なんてできません。ぼくにもわかるようにドイツ語で説明してくださいな。

市民：ドイツ語で説明するの、それはちょっと難しいなあ。

手工業者：じゃあラテン語でどうぞ。多少解説をお願いします。ぼくにも何かわかるかもしれません。

市民：それはラテン語で磁力 *vis magnetica* といわれる特別な力によって起こります。

手工業者：えい、えい、思い出せ、たしかぼくはそれを読んだことがある。

市民：それを何で読んだの。この力のことを覚えておけば、必ず御利益があるよ。

手工業者：そこからまったく益を得ない人もいます。彼らはそれをパラケルススの出鱈目と呼んでいます。そんな人たちにかかれば、この考えを信じる人たちも、洗濯夫やおしゃべりおとこ呼ばわりされるのです。

市民：でもぼくはいにしえの名医たち、薬に通じた名医の言うことを信じるよ。だれもみな一様に、他人の体だけでなく自分の体にも、ペストの時期にはこの磁力がよく効いたと言っています。そればかりかこのことを自分たちの至高の秘密とも考えたのです。パラケルススの出鱈目だなんて。ガレノスの教えだけに忠実な名医も、それが正しいこと、真実であることを認めているのに。なかにはペストの時期に砒煙を常時持ち歩くものもいたし、つねに心臓の上に水銀をつけているものもいました。さそりの油を心臓や

動脈に塗って、それで予防するものもいました。イタリアでさそりに刺されるものが出ると、刺し傷にさそりをのせて、さそりの出す油を局部に塗るそうです。どこの国でも、犬に噛まれたり蜂に刺されたりする人が出ると、犬の毛や蜂を傷口にのせて、助けたものです。毒を抜き取るために、ペストの瘤に干したガマガエルをのせるけど、あれってよく効くじゃない。磁力でなくしてどんな力が働くというのか。それがいずれの場合も毒を抜く力です、磁石が鉄を引きつけるように。磁石にはもともと鉄の霊が宿るからです。鉄は鉄を引きつける。自分の霊に似たものから離れたくないからです。悩みがあることに悩む人、飲食の後に飢えや渴きを覚える人のように、類は友を呼ぶものです。同類から自分の分身を全霊挙げて引き出し、自分を肥やし、強化するのです。(食物の内容物がすぐに萎えた四肢に届くとは思えません。でもそのなかのとりわけ繊細で霊的なものなら、そうではありません。食物はまだ胃のなかにあるのに、四肢を動かし、人を元気にするからです。)この薬の磁石が毒に対して使われると、自分の同類、すなわち毒を人間のなかに嗅ぎつけ、同類をその人から引き離すのです。だから毒が人に被害を与えることはありません。もっとわかりやすく言いましょう。元来水を好み、体内に蓄える海綿のようなものです。水が失われたり、人が手で絞ったりすると、一筋の水にも反応し、自分の体がまんたんになるまで、それを少しでも長く、少しでも多く吸い取ろうとします。

手工業者：よくわかりました。毒のある物質から毒を抜いてやり、それが人間のなかに毒を見つけると、いつもより貪欲にそれを引きつけようとする、でもそんなことが本当に起こるのでしょうか。海綿から水を奪うと、たちまち上手に水を引きつける、毒素でも同じことが起こるのでしょうか。

市民：そのとおり。砒素という恐ろしい毒から香油が作られます。たとえばそれを動脈につけると、人から毒を抜き取ります。他の物質を合わせると、美しい赤のクリスタルガラスを作ることができます。心臓につけると予防効果が高いために、よく神の薬とも呼ばれます。それなのにいまはガレノス主義者しか生の毒を使うことを考えていない。それを習い、準備することを。

手工業者：それ以外の多くの人たちは、石炭を砕き、それに混じった異物に手で触るにはあまりにも軟弱です。彼らはもう博士だから。彼らはそれを習わな

いし、それをやる人たちを灰吹き人と呼んでいます。

市民：自分で手を貸し、薬を作るのを厭わなかったヒポクラテスやガレノスよりも、彼らのほうが立派だとでもいうのでしょうか。

手工業者：ぼくはパラケルススをそんなに買いません。薬のことをろくに勉強もせず、油を蒸留するくらいしか能がないのに名医と偽り、千客万来賑わう輩が、もしくは善良な人たちをたぶらかし、害を及ぼしても平気な輩がいるからです。

市民：このような巡回者、詐欺師、たちの悪い見習生から得るものは何もありません。お上は彼らの治療行為を許すべきじゃない。たとえ許すとしても、それを医療技術に加えるべきじゃない。ぼくはガレノスを学ばないパラケルススもどきは無だと思うよ。秘伝の医薬に通じないガレノス流医師からも、得るものはほとんど何もありません。

手工業者：これら勘違いの医師は尊大になり、人々に取り入ります。彼らが本物の医師でないことを見抜くにはどうすればよいのでしょうか。

市民：彼らに病名を讀んでもらい、その原因、徴候、診断、治療を書かせ、己が何者かを名乗らせるのが一番じゃないかなあ。それができなければ、お日様の下のバターのように動くこともできず、たたずむばかりです。思慮分別のなさを白日の下にさらし、病気について患者とは何の関係もない、まったくお門違いなことを、本から書き抜くに違いありません。それは簡単に見抜けるはずです。

手工業者：それについていまはこれ以上立ち入らないことにしましょう。ぼくが納得すれば十分だから。磁力をもつと考えられる薬以外には、毒に抵抗する方法がないのか聞きたいのです。

市民：どんな毒も二通りの仕方で追放、一掃されます。一つは同じものによって、磁力を使って。しかし同じ毒が同じ毒を治療すべきです。その毒が薬になり、他のものを引きつけることができるように、事前に整えられるべきです。生の毒が表面に使われると、先に紹介したように、ペストに対して大きな効果を発揮することをぼくは否定しないけれど、加工するほうが生のまま使うよりもずっとよいと思います。しかし毒を和らげるもう一つの方法はまったく正反対で、毒に逆らい、毒を斥ける方法です。

手工業者：ぼくはそれをどんな風に理解すればよいですか。

市 民：本物の結石、一角獣、加工した鹿の角は毒を引きつけず、それに激しく反発します。だからそれらは汗によって毒を徹底して追い払います。ここはそれらを説明する場面ではありません。

手工業者：どちらの方法がよいのでしょうか。

市 民：ぼくは予防も治療もできるほうがよいと思います。

手工業者：まったくです。でもそれはどこにありますか。毒と健康、生と死は共存できますか。

市 民：大丈夫。先ほどお話したくさり蛇ほど毒性の強いやつはいません。にもかかわらずその毒は、いにしへの医師たちにいろんな病気に使われました。それどころか彼らはずぎのように書いてさえいます。その肉を食べる人は長寿を全うすると。ガマガエルは毒をもった嫌われる生き物じゃないけど、彼らはガマガエルの石から何が得られるのか知っています。でもそれが毒を引きつける磁石の働きをするだけでなく、調合の仕方がよくわかっている人には薬としても有益だということが、づぎにする本当にあった話からもわかります。

手工業者：もちろん聞きたいけど、手短にお願いします。

市 民：水腫を患う夫をもつ妻がいました。彼はもう長く病に臥せていました。妻は夫に嫌気が差し、(薬もいろいろ試したが、効かなかったので) どうやったら夫を亡き者にできるか思案して、彼にガマガエルの粉末を与えました。夫の放尿の回数が増えました。妻は思いました、彼が死ななかつたので、薬が少なすぎたのかもしれないと。そこでもう一度、今度は量を増やして与えました。しかし(そうと知らずに)彼がこれを摂取すると、放尿の回数が爆発的に増え、それによって以前の健康を回復しました。

手工業者：ぼくもそれを信じます。痛々しい茨の下に、美しいバラが咲くようなものか。神は奇跡のお方、しばしば一つのものに最善と最悪を一緒に住ませました。人間だけがそれを正しく見分けることができます。ところでぼくは元の話に戻り、もう一度尋ねます。ペストの時期に薬を取り替える必要はないと、君は本当に思っていますか。

市 民：ええ、それは君も言うとおりに必要じゃありません。

手工業者：どんな根拠があってそう言えるのですか。

市 民：ミトリダテス王について書かれることですが、彼はミトリダトだけを常

用しました。毎日数回の服用で、最後は大きな得をしました。どんな毒も彼の生命を脅かすことはできない。彼は生きて虜囚の辱めを受けずという格言を地で行き、毒を飲んだのに彼の意志に反してそれは効果がなく、彼の生命を侵すこともありませんでした。だから一人の人間はたった一つの、すぐれた薬、効き目が確かめられている薬にこだわるべきです。毎日数回それを服用し、ミトリダテス王のように身体を強壮にすれば、自分の身を守ることができます。そうすれば、毒がその人のなかで繁殖したり居座ったりすることはなくなります。

手工業者：ぼくは君の意見に大賛成です。本当に必要ならば、毒に対して多くの薬を買うことのできた王がこれをやったのだから。

市民：疑問はこれで全部ですか。

手工業者：まだまだです。まだ他にたくさんあります。

市民：どんな。

手工業者：たくさん読めば読むほど、意見の一致するものは一つたりともありません。あちらが立てるものをこちらは斥け、こちらが立てるものをあちらが斥けるといった具合です。

市民：こんなに深刻、危険極まりない病気で、それらがまったく正反対のことを説くとすれば、それをこなせるようになるのに優に一年はかかるでしょう。問題になるのは誰、貧者と富者を両方合わせた患者ですか。

手工業者：君たち金持ちではなく、ぼくたち貧乏人です。ペストが猛威を振るったとしても、君たちは逃げる、医師の言うことが正しかったか間違っていたかなんて、君らにはどちらでもいいことです。

市民：意見が一致しないのはどこですか。

手工業者：予防と治療の両方です。

市民：たくさんありますか。いったい予防のどこが。

手工業者：芳香のする物質で燻蒸せよと説くものがあるかと思えば、反対に悪臭のするものを使えと説くものもあります。悪い空気をもっと悪くなった空気で追い払えと言うのです。燻蒸のために劇物を使えというもの、逆に刺激のないものを使えというものもあります。全員が正しいことを言っているということはありません。素人は誰の言い分を聞くべきなのでしょう。

市民：なぜいま空気のことをそんなに気にするのか、ぼくにはわかりません。

非の打ちどころがないのに。いまのまま放っておいて大丈夫です。まったく問題のないところに手をつける必要はありません。でも少し空気が汚染された地域、もしくはそれに隣接する地域であれば、快適な物質で有毒な空気を改善するのをためらってはなりません。

手工業者：では何で燻蒸したらよいでしょう。

市 民：劇物は禁物、とくに気候が熱いときは。結局毒が薄まり、細くなり、広がり、ますます拡散するだけだから。経験も教えているように、ペストは空気が若干よどみ、重苦しく、朦朧としたときよりも、明るく、快晴、暖かいほうが猛威を振るう傾向があります。もちろんぼくも、寒冷になると劇物が役立つということを否定するつもりはありません。良質のワインビネガーを単独で、あるいはヘンルーダ、チョウジ、バラ、ビャクシン属の実などなどを調合し、熱く熱した煉瓦に注ぎ、煙を炊き込める。それは決して無駄にはなりません。

手工業者：それはいい、それなら高くつかないし。

市 民：琥珀や麝香を使って燻蒸消毒するより、ずっとよいはずです。他にまだ悩みはございますか。

手工業者：ペストにかかる率をぐっと減らすために、瀉血もしくは通痢をすべきだという人があるかと思えば、これに真っ向反対する人もいます。体液（彼らはそう呼びます）を活発にすべきではない、そうすればペストが付着しやすくなるからだということです。ペストの時期には風呂に入るなという人がいるかと思えば、それを励行すべきだという人もいます。…。

（以下次回）

本稿は平成19～21年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「近世ヨーロッパの神学的ペスト文書 世界の脱魔術化に関する学際的研究」(研究課題番号19520641)による研究成果の一部である。

Europa in der Frühen Neuzeit, gesehen aus einem Dialogus über Pestilenz

von Hiromitsu Sasaki

Das folgende ist die Übersetzung einer Quelle mit dem Titel „Dialogvs medico-chymicus. Ein Gespräch/ Vber den Artzten/ so von der jetzo regierenden Seuche der Pestilenz geschrieben haben/ vnd vber jhren Artzneyen/ Gehalten zwischen einem vornemen/ gelehrten Bürger/ vnd einem Handwercksmanne/ in einer berumbten Stadt Sachsenlandes“ von 1607. Das Gespräch über die Pest, dessen Autor unbekannt ist, habe ich in der Herzog August Bibliothek in Wolfenbüttel gefunden. Die Pesten suchten im Zyklus von 10 bis 20 Jahren bis in die 1680er Jahre Teile des abendländischen Festlandes heim. Deswegen waren die Massnahme gegen Pest in der Frühen Neuzeit sehr wichtig. Auch viele Pestschriften und -traktate wurden durch Ärzte, Theologen und Pastoren, und Verwaltungen geschrieben. Aber die Pestschrift in Form vom „Dialogus“ ist, soweit ich sehe, einzigartig. Sie ist deshalb sehr interessant. Indem der Autor das fiktive Gespräch über die Pestärzten und ihre Arzneien einen gelehrten Bürger und einen Handwerker führen lässt, tritt zu Tage, dass er die Pestschriften und -traktate zu seiner Zeit kritisch rezipiert hat. So habe der Handwerker gefragt, welche von jenen vielen Arzneien, die die Ärzte empfehlen, man gegen die Pest gebrauchen solle. Denn sie schreiben, so der Handwerker, man solle die Arzneien wechseln, und nicht nur eine, sondern viele gebrauchen. So sollen andere Arzneien die „Weiber“, andere Arzneien die Kinder, andere Arzneien Herr und Frau und wieder, andere Arzneien das Gesinde gebrauchen. Darauf habe der Bürger beantwortet, dass man sich auf eine Art der Arzneien beschränken solle, die ihm am besten stimme. Außerdem habe der Handwerker bezweifelt, dass man das Gift gegen die Pestilenz gebrauchen solle, wie die meisten Ärzte behaupten. Hingegen habe der Bürger von der Wirksamkeit des Giftes erzählt. Die Übersetzung der zweiten Hälfte des Gesprächs soll im nächsten Jahrgang publiziert werden.

(2010年2月5日受理)